

# 幼児前期の対象活動の意義

——とくに事物認識と技能習得について——

①



平岡節

## 一 標題について

● 幼児前期とは——出生から就学前までを幼児期と考え、その前後の区分の基準を自他の区別の客観化の度合いにおいた。その大まかな年令的境は心理学の諸研究の成果によると、現在一般的に生後三年目頃にあると考えられている。したがって本研究の対象児は出生から三六カ月までとする。

● 対象活動とは——人間の活動の諸対象のうち、ここでは事物に限定する。したがって厳密に言えば、対象物に対する活動である。これは子どもを夢中にさせる、いわゆる「いたずら遊び」である。

## 二 研究目標

出生から三六カ月までの子どもの

1 対象活動はどう変化・発展するか

2 その要因はなにか

3 その過程で

イ 技能をどう習得し

ロ 事物をどう認識していくか

ハ 認識と技能の関係はどうあるか

つまり、対象活動のなかにみる事物認識と技能習得の法則性はどのようなかを調べてみた。

註 1、技能と技術の区別……技術とは、目的達成のための手段の客観的

内容の明確に意識化されたものであり、技能は目的実現の手段に対する意識に客観性を備えない段階と考える。田辺振太郎著「技術論」による。

2、技能習得とすべきか、獲得とすべきかについて明確な判断がつかないまま、一応習得とした。

### 三 研究手続き

研究目標達成のため、子どもの対象活動の実態調査と文献を参考に考察した。

#### 1、実態調査

● 対象児 昭和三六年八月現在、生後三九カ月 三二カ月 一八カ月 一二カ月（二名）になる男児四名 女児二名計六名からなるA群と、生後一二カ月児約五〇名 三六カ月児約一〇〇名計一五〇名からなるB群である。

● 各群について A群は母親の個人的育児日記によった。この母親達はいずれもかつて幼児教育学を専攻した家庭婦人である。父親は一人が児童画研究者である他は、いわゆるサラリーマンである。対象児は、いずれも第一子であり、そのうち一人は弟がある。家族構成は父母と本人の三名か、それに弟を加えた四名である。住居地は諸地方の都市住宅街であり、中産階層である。

B群は、その母親の共同研究「赤ちゃんの日課」「子どものあそびと玩具」他（婦人之友五三巻第五一九号）に記載された個人記録の抜萃と統計によった。その記録者は大体母親である。その家族構成・階層はA群に似ている。しかし父母の職業・居住地は種々である。したがって、その育児形態、環境も多様である。

● 両群の日記はいずれも、母親が子どもの育児について覚えがきしたもので、本研究のため特定の目標設定下に記録したものでない。

#### 2、参考文献

これらの子どもの発達水準を一般的水準と照合するためと、それらの要因、その他を考察するために以下の文献を参考にした。

- 1、山下俊郎著 幼児心理学
- 2、ゲゼル著 乳幼児の心理学 山下俊郎訳
- 3、ノヴォクローキ著 発達心理学 渡辺十四訳
- 4、トオリス著 乳児及び幼児の教育 周郷博訳
- 5、波多野完治編 精神発達の心理学（ワロン）
- 6、同 著 心理学入門
- 7、拙 稿 幼児の形の表現形式の発達と内部活動の関係
- 8、スミルノフ著 心理学
- 9、キャッテル The measurement of Intelligence of Infants and Young Children

- 10、ホルトマン著 人間はどこまで動物か 高木正孝訳
- 11、田辺振太郎著 技術論
- 12、芝田進午著 人格と人間性の理論

#### 四 対象活動の全体系

（事物認識と技能習得）

つぎに、実態調査によって得た事実の整理と、それについての解釈を試みたい。

第一表は、対象活動の全体系とそれに関係する事物認識（以下省略して認識と呼ぶ）と習得する技能の内容である。

第一表

月数	1～3	4～6	7～24	
姿勢	横首 臥	坐位	転直歩 位立行	平衡性 統制
対象	感覚作用期 発生	対象獲得期	対象獲得究明期	思考的利用期
象	追定位 視反応	接獲凝 近得視	操究探 作明索	経験知識能力の 実践 直象的 観的 利用 美的 因果 的 關係 的
動	視覚的 聴覚的	触覚運動的	触覚運動的	全身運動的 覚化の傾向 思考性と視
技	眼と首 (耳)	基本的 操作 はなす にきる	操作様式 の多様化 ゆかえ なげ 出し 持ち 入れ たたく	平衡性 積み重ねる 持ち運び 操作様式の複合 器具の機能利用
認	認	識	諸性質理解 数量 軽大厚二 量小薄狭多	色彩・形態 機能 因果関係
識	識	別		

註 1、文中、AとあるはA群、BはB群、全とは両群に  
みられた実例である。  
2、文中の数字は、前記の参考文献の番号である。

『感覚作用発生期』 一―三カ月

授乳以外は殆んど睡眠時間であったのが、三―四週目頃から目覚めの時が次第に多くなり、一人遊びをするようになる。これは大脳皮質の活動―興奮―によっておこる現象であり、一方制止活動未発達(3)のため興奮を静めるのに彼らは苦勞し、眠いと手で顔の

あたりをひっかき廻したり、むずかるようになってくる。この時多くの母親は寝具の上から軽く叩いている。これは興奮を静めるのに役立っているようである。

● 視覚的対象活動

一カ月の終り頃、母親の顔の動き、白いものの動きを追視するという視覚的めがめがみられる。(全)この頃母親は吊る玩具を与えたり、動きに対する反応をたしかめようとしてあやしながいろいろの試みをしている。このことは、子どもの視覚的対象活動を促進する役割を果していると考ええる。

● 聴覚的対象活動

出生当時は強い音響・振動に対してだけビクッとする様子がみられる(A)が、三カ月頃になると音・振動にさかんになるほか、ラジオから流れる音楽に手足を動かし、母親の足音をしるばせられた接近でも感じとり定位反応を示すようになる。(A)

このように視覚的対象活動から、聴覚に訴えるものをさらに視覚がこれを追い、その認知する対象が次第に拡大されている。ノヴォグロッキーは「三カ月までは感覚作用が集中的に発生し……視覚は生後二、三日目から……聴覚はややおくれ、三カ月たつと頭全体

が音源の方向に向くようになる」(3 八〇頁)といっている。つまり、対象活動は視・聴覚運動と首の運動の協働によってはじまる。その協働は内部と外部からの刺激がからみ合って発展していると考えられる。

● 手の活動

初期にみられる手の活動は全身運動を伴う反射的動きである。その動きは感情の分化に伴い変化している。それは泣き方の変化と同様である。その他の手の動きとしては、ゲゼルは「三カ月目になると視覚中の対象に対する反応として、一定方向の腕の運動があらわれる」(2 一四六頁)といっている。が本調査では、ただ一つ、三カ月終り頃偶然ふれた布を動かした一例がある(A)だけで、その後種々試みたが積極的対象活動は認められなかった(A)。この接触刺激に対する反応のおくれについて、ヴォグロッキーは「神経繊維の髓鞘化の未完成のため、感覚中枢と運動中枢の一時的結合が形成されず、保有の刺激に適合しえないで、各器官の協応・或いは細分化がなされない」(3 七九頁)ためであるといっている。

以上のような諸感覚作用の目覚めは積極的対象活動の準備であるとする。

「対象獲得期」

四一六カ月

● 対象への意思的全身の接近

対象方向への運動は、首の運動に次いで肩、上半身の動きや平面的廻転運動、つまり寝返りがはじまり、手足が平行的に動くようになる。

例えば、四カ月頃坐らせて玩具・哺乳ビンを見せると体を前にかがめ手足をバタつかせている(A)。また六カ月頃音のする方向にねがえりをうとうと努力しているが、やがて人の助けをかりながらそれが完全にできるようになっている(A)。また自分の行きたい方向や自分に手を出されると体や手まで出すようになる。

要するに、この頃周囲の人々は、あるときは子どもが対象を認知するよう、またあるときは対象接近の意思を察して、その目的達成の助けをしている。このことは子どもの対象接近の意思を高めるとともに、その身体機能の確立に役立っている。しかもそれは自己の努力と周囲の援助・交渉によっている。

● 手による対象獲得

これに続いて、指の運動が活発になり、自分の指を動かしたり、オシャブリを持たせられて一人遊びをする。この一人遊びの長さは玩具の重さが関係しているという(A)。それはまだ自分で、手ばなすことができないためである。また子どもはしたいにしわを寄せ眼球を寄せているという記録もある(A)。これは眼球構造がまだ遠視的(2・3)であるためと同時に、凝視能力の形成を意味する。対象獲

得のためには、姿勢の変化、腕・指の運動能力、凝視能力が関係している。凝視能力についてゲゼルは「二一―二八週に完成される」（2 一四五頁）と、ノヴォグロッキーは「五―六カ月目にあらわれる」（3 八一頁）といっている。また先きにあらわれた追視は本調査では五―七カ月頃盛んになっている。獲得活動は殆んど六カ月頃その目的を達している。これはノヴォグロッキーの研究「五―六カ月頃、その全活動の七〇%の確率をみる」（3 八一頁）と一致する。また六カ月頃、掴んだものを「離す」「落す」ことがわずかにみられる（A）。この動作は七カ月以後さかんになる対象操作活動の基本動作である。

#### ● 唇による対象識別

三カ月後半、両手を口に入れることがよくみられる（A）。やがて手によって獲得したものは何んでも口に運ぶようになる（A）。この手や物を口に運ぶことは八カ月頃までさかんに続き、一年を過ぎてもしばしばみられる（A）。この時期の唇は対象識別の主眼的器官である。トオリス（4 二二〇頁）とワロン（5 二四九頁）が同じ見解を示している。つまり、この頃の手は対象獲得を一次的に、対象識別は二次的であると考える。いいかえると、物をもっただけではその物の性質を充分感じることができず、唇にもっていかなくてはじめて、そのかたさ、滑らかさなどを感じとる。しかし、この手の活動―獲得―は識別（認識）を助ける役割をもつだけでなく、物を操作する

能力（技能）を習得していくはじめてである。

こうして生後わずか数カ月にして体を動かす能力は、対象獲得と認識の意欲、つまり対象活動に支えられて発達している。また対象活動は身体運動能力の確立によって高められている。

#### 「対象操作 究明期」 七―二四ヶ月

この頃、坐位 匍匐 つかい歩き 歩行などと、相次いで人間的姿勢を確立し、身体移動範囲が拡大されるとともに、手は対象活動の主眼的器官となる。これに伴い活動の対象と操作様式は急激に変化し、「周囲のものに興味シンシン」（A）となる。これとともに、コトバの習得がみられ、周囲との交渉が人間的になる。このことは自己自身の対象活動による認識をより高め深めるのに役立っている。一方、コトバの習得も対象活動の過程で周囲の人々との交渉により促進されている。

#### ● 手の活動の多様化

この時期の活動は、指先きの運動の細分化とともに、腕の構造からくるあらゆる運動様式、つまりひじの曲伸、肩を支点とする円、上下、水平運動などをとり入れ、対象操作は多様化している。

その内容をみると、

最初坐ったまま、物をふり廻す、叩く、ちぎる、もむことから持ち替えたり、出し入れ、ふた・戸の開閉などをあきることなく、く

りかえしている。この持ちかえるときの手は、左右同時に異った運動をしている。これは対象操作技能として特筆すべきことである。また物の出し入れ・ふたの開閉は、容器としての機能についての認識と大小の区別を具体的に知るはじめてであろう。このことは環境支配から、さらにすすんで環境を合目的的に変革する能力を高める重要な契機であると考ええる。

また、つたい歩き、歩行の確立によって対象活動は、さらに多様化していく。なげる、ころばす、持ち運び、ゆする、積み重ねることなどがみられる。子どもはこの対象操作の諸様式によって起る物の運動の相異をみとどけている。円形球形と、かど・稜のあるものとの運動の相異、また床面にぶつつかる音・はずみ方を識別している。

つまり、視覚的に対象を認知し、持った時における手の触覚運動と操作の結果を結びつけて、その物の性質を理解している。ワロンはこの触覚的な知覚がある程度構造をもつのは生後十カ月頃であり、最後には物体を操作することができるといっている。(5、二八〇頁)

また持ち運びは、最初一つ持つことからはじまり、やがて両手に一つずつ持つ。また、積木を二つ積み重ねることを他人の行動模倣(他人の積んだものをこわし、それから自分で積んでいる。このことについては六で詳細に述べる。)によってはじめる(A)。この積木の構築が三つ以上になるのは、ずっとおこなわれている。

一方、「絵本の頁を丹念にめくる」(A・二二〜一四カ月)「アリ・ゴマをつまむ」(B 一五カ月)のような小さな指先きでの操作から「大

きなカバン・坐ぶとんを力みながら持ちまわる」(A・B)ことをむちゅうで繰り返す。またこれと同時に室のすみ・物の下にもぐり込む(A・B)など空間探索をはじめている。これらはいずれも自己の力量の限界を試している。

この間、子どもの対象操作の諸様式は最初同じことをくりかえし、やがて結果をみとどけ、次いで結果を予測して目的達成のため慎重な態度をとっている。この過程は、ある操作のくりかえしによる効果と、低次ではあるが操作手段が意識化(技能から技術的)しつつあるものと考ええる。例えば、積木の構築が二つから三つへ進むことができるようになる理由の一つに操作手段の意識化があると考えられる。

要するに、自己の身体機能を駆使する過程で、物の操作技能を習得し、同時に触覚運動を主体とし視聴覚の協働により物の諸性質を認識しつつあると考える。また全身の運動の関係で、物と空間の測量を試みている。

つまり、軽重・大小・厚薄・高低・広狭・二つと多など数量的に対象を認識することもはじめている。したがって、数量的認識は触覚運動と全身運動によっている。また事物の性質認識は数量的認識に先行し、数量的認識は充分意識化されておらず、性質認識よりヨリ主観的であると思われる。

### ● 部分的識別と分類能力の兆候

以上のような操作活動は繰り返し行なっている。その結果、やがて対象を触覚運動以外、つまり音をきいただけ、あるいはみただけで対象の形その他の性質・機能までも、ある程度わかるようになる。これは、対象操作によって、対象についての表象をもつようになっていくことになる。これをさらに一般的にいえば、感覚・知覚を主体にした表象をもつ、つまり感性的認識をもちつつある」と考えられる。これとともに、自己の対象活動に伴う人々のコトバでの反応・交渉は対象の名称を知る契機となり、対象認識の一般化・社会化の助けになっている。

この形態・性質・機能を知るといふ認識は、最初部分的にバラバラである。この部分の認識は、一つのまとまった全体のなかの細部としてではない。が、やがて対象間の対応する特性が関係つき、自己のもつ部分的認識を基準にして物を分類するようになっていく。

そのためにはコトバの理解が重要な役割をもつと考えられる。実際をあげると、自己の目や耳と玩具の動物の目・耳が関係つき、「○ちゃんのお目めは?」「ワンワンのお目めは?」と問えばそれぞれ目を指さす。この分類能力は、部分的にもつ認識の一つの筋を通し関係的に認識していくはじめであると考えられる。さらに進んで、実物とその模写が結びつくようになる。これは記号化の能力を示すものと考えられる。この物事を関係的にみて分類することと、記号化は事物に対して客観的にせまるために重要な契機である。

また、最初積木だけを模倣的に積み重ねていたのが、形態的分類

によりマッチ箱・石ケンの空箱なども自発的に積み重ねるようになる(A)。これは先きにあげた絵の理解とともに比較・分析・総合などを不完全ながらはじめていると考える。ただこの頃絵を逆さにしてもみる(A)。この上下無視は対象の空間関係の認識の不確かさ、いかえると部分と全体の関係の把握が充分行なわれていないと考える。つまり、先ず物自体の各部分の認識、次いで各部分の関係ができる。しかも、各部分の大きさなどについての関係認識(比較の完全さ)はおくれているように思われる。また一つの物の認識は先ず一次的に部分的になされて後、総合的認識が完成されていくように思われる。さらに物とそれをとりまく空間関係(一事物と他の事物の関係)の認識が完全になるのは、かなり後になるようである。

この事物間の関係認識の変化は人々の行動模倣の発展にみられ描画活動や物の長さ、高さの比較のまちがいにもあらわれている。その例を描画活動にとってみる。

子どもが一事物をかくとき、部分的形の接合による表現形式をとる、後その部分は全体的形のなかに融合するようになる。これは一事物の部分は接合でなく、統合されているという認識的表現であろう。また一事物と空間全体の関係認識をみると、いわゆる羅列式あるいはカタログ式といわれる表現形式のあと、ずっとおくれれてベースラインがあらわれる。(7)もつとも、描画にみる形の表現形式は一般的に認識よりおくられている。

このおくれた解釈を試みるならば、それは認識の一次性と二次性

及び描画経験の貧しきにあると考える。つまり、部分的認識を一次的にし、部分と全体的・立体的な関係での認識は二次的に行なわれつつあり、しかも表現するという「抵抗」にあつて二次的な認識(充分意識化されていない)は描画にあつて意識からは後退し、しかも描画経験の頻度がそれに関係していると想像される。

一方、このおこなわれている物とそれをとりまく空間関係認識の内容は、自己の関心・経験あるいは意識と関係があるように思われる。それは、玩具の自動車などは必ず車を下におき、屋根の部分をもつて押しながら、その車の動きを熱心に観察しており、逆さにおくことは殆んどない(A)。これを一般的にいえば、認識の発達は自己の意識・行動(対象活動)と深く結びついていると考えられる。

#### ● 対象の社会的機能理解と自他の区別

他人の対象活動の模倣は記録によると、八カ月頃からはじまっている。その最も初期的現象の一つに書字についての模倣がある(A)。これは、人が書いているその鉛筆をとりあげ、そこにかきなぐる。この頃子どものためにべつの用紙と鉛筆を与えても、模倣のモデルの用いているもので書くことを主張する。しかし、モデルが用具を子どもに取り上げられて何もできず茫然としているとやがて子どももその活動を中止してしまう。このように周囲の人々をなやます模倣はモデルにベッタリ密着しており、行動の秩序を理解していないものである。しかし、やがて自分の用具を与えられると、モデルと

並行的に同じ行動をすることができるようになっている。この模倣活動はモデルの動作のなかにある秩序を学びとったことと、その過程で自他の区別ができるようになっていくことを示すものであると考える。

その後になれば、ある事物をみると周囲の人々が行なっていた活動を想起して、その活動を行なうようになる。例えば、ドライバードライバードをみると修理作業の模倣(A)ができるようになる。つまり、一部分の知覚が与えられると、時と場の距離をおいてもモデルの対象活動の模倣ができるようになる。これはその事物についての表象をもっていること、及び事物そのものの機能あるいは社会的機能を知ることになりつつあることを示すものであると考える。これを描画活動に例をとってみる。他人の書字の模倣にはじまった描画活動は、最初白紙よりかえって字や絵がかかっている印刷物にかくことをヨリ好み、時間的にも長続きする傾向があるという報告がある(A)。これは印刷されていることに刺激されての行動であると解する。それが書字行動の秩序についての理解と、白紙以外のものへのらくがきに対する周囲の人々の制止とがからみ合せて、やがて白紙にでもあるいは白紙にだけ描くようになる。これは自己の活動に対する周囲の人々の反応によって、自己の活動の社会的価値の基準をつくると同時に、紙の社会的機能(用途)を知りつつあると考える。

またこの頃子どもがよく破ったり、らくがきをする絵本の頁を詳細に観察してみると、それは、その時々々に特に興味をもったものが



描かれているところであるという報告がある(A)。これは自己を対象に没入しなければ満足できない状態、いいかえると自他の未分化によるものと解するのはあやまりであろうか。

以上のような一連の模倣行動の変化は、周囲の人々自身のコトバ・表情を伴う対象活動と、子ども自身の対象活動という実践及びそれに対する周囲の人々の反応に対応する思考活動によっている。その過程で彼らは対象操作の技能を学び、同時に対象そのものの機能とその社会的機能を学び(認識)とっている。それはまた自分と他人、自分と事物の関係が客観化する過程でもあったと考えられる。

### ● 全身運動と平衡性

この頃、積木の構築の他ブランコ・シーソー及びスベリ台その他の運動遊具の使用などの対象活動による全身運動と平衡性の感覚の発達がみられる(全)。この頃、「平衡性を保つために必要な三半規官が特に発達する」といわれる。(6 七七頁)。またワロンの平衡性習得の説をみると「子どもは歩行能力獲得の努力のなかに自身の平衡性を学習する。この平衡性は主観的である。積木の構築に関係するのは正視図的である。これは垂直性・水平性・直角性の直観を含んでいる。しかし子どもが垂直・水平・直角を学習したとは思われなない。子どもは歩行による主観的平衡性のなかに事物の安定軸としての垂直性を統合していると考ええる。」(5 三二頁)といっている。確かに歩行能力とともに全身運動を伴う遊具の使用によって主観的

平衡性を学習するであろう。しかし、これだけでは前記のような(石ケンの空箱・マッチの箱の構築)自発的構築活動の説明はつかないように思われる。つまり、それらの箱と積木との形態的共通点が把握されなければならないと考えられる。そこには、対象活動の過程で対象を感覚運動的に、また知覚的に、さらにそれらによって表象をもち、垂直性・水平性・直角性が低次ではあるうが把握されているのではないかと考えられる。

構築は小さな単位のを幾つか重ねて、より大きな高いものをつくり上げることである。つまり、構築能力は環境を革改していくことにつながる能力であると考える。

そのためには、平衡性の獲得は不可欠な条件である。三半規官の成熟と全身運動の相互作用によって平衡性を学びとり、自己の身体的統制能力を身につける。これとともに手による対象操作によって物を自由にするこや支配するばかりでなく、さらに進んで変革する能力をも身につけていくと考えられる。

この身体と物の統制・支配能力は自我意識へと発展すると波多野氏は述べている。(6 七七―七八頁)

以上のように姿勢とその他の身体機能が一応人間的になる。このことよって、環境への迫り方は、周囲の人々とコトバで交渉をもちながら次第に主体性を確立している。その過程で対象操作様式は多様化し、その量と質に変化をみせている。この操作様式の多様化

は操作技能の習得を意味する。それはまた自己の身体諸機能を発達させることにもなっている。

この自己活動によって、対象操作にともなう対象の変化をみとどけたり、周囲の人々との交渉（おとなが遊びの相手になったり、人々の対象活動をみる）のなかで彼らは対象についての認識を高め深めている。それはとくに対象操作による触覚運動を主にしての認識である。対象獲得のための掴む動作によって対象の印象を受け取り、時間的経過によってその印象を記憶する。次いで離す動作は、この印象の忘却と再生を行なうものである。この手の対象操作の基本形式は対象識別の初歩である。その印象の内容は量感・圧感などの複合的主観的感受性に訴えた認識である。

次いで、操作の多様化と身体諸機能を参加させて、自己の活動との関係で対象の性質・機能を認識している。この対象操作経験による認識の内容は思考作用つまり経験の意識化が関係している。その思考作用は、自己の対象活動の意欲と周囲の人々の交渉のあり方が関係している。とくに対象活動に伴う人々のコトバの内容に左右されていると思われる多くの例をみた。（後述）

#### 「対象の思考的利用期」

二四—三六カ月

これまでの対象活動は、感覚運動・知覚を主体にしたものであった。彼らはその過程で事物についての種々な表象を蓄積している。

やがて、その表象を活用し、生活のために事物を積極的に利用する

ことをはじめている。

一方彼らの生活空間は行動の場の拡大とともに、思考の世界をもつようになつてくる。思考の対象領域は知覚の領域をのりこえる。

しかしこの思考活動の基礎には表象がある。つまり、自己がもっているいろいろな表象を活用している。表象は知覚の一部を与えられるとき、それを補う機能をもっているからである。

#### ● 象徴的对象利用

この頃の子どもの生活の主なもの、身近かな人々の生活（とくに日常生活、家事労働）やその他の経験を再現することである。つまり行動間に秩序のある事実の模倣・初期的役割遊びである。その経験を再現しようとするとき、そこにある事実と経験の事実の間に多くの矛盾を感じる。いいかえると、可能の限界と願望・要求の間に矛盾を感じる。この矛盾の解決のために、さかんに事物を（いわゆる）想像的に利用している。その代用物はモデルの完全な具象を備えている必要を感じない。柱は水道に、積木は犬に、靴は汽車になる（A・B）。それらの代用物と実物の間に何らかの（形態・色彩・触感など）経験的印象・直観の共通点を見出している。そこには表象の機能が活動している。いいかえると、事物の象徴的利用であり、それは事物についての部分的識別・分類能力の実践である。この象徴的利用は記号的利用でもあり、抽象的思考が活動していると考える。

## ● 因果関係理解と対象利用

表象に基礎をもった抽象的思考活動がさかんになると、彼らの世界観にも変化があらわれる。

その一つに、自然的、社会的諸現象を因果関係的に理解しようとし、思考的に解決を試みるようになる。しかし、それは自己のみつまずしい経験から得た不完全な表象と思考からは出ることができず、事象の本質からはずれていることが多い。因果関係理解とは、元来ある条件のもとで、ああすればこうなるという物事を筋道をたてて明らかにすることである。ところが、子どもの場合「ある条件が偶然的・非本質的なことにとらわれることが多い。そのため、その理解・解決の結果はいわゆる『自己中心的』あるいは童話的になる。」

一方、この頃童話をよろこぶ。それは語られる事実（事象）を筋道をたてて、因果関係的に理解しているからであろう。したがって、その内容は自己の経験と関連したものにヨリ多くの興味を示している。

この因果関係理解は遊びにもあらわれる。人形の看病遊びの一例をあげると、(B)

「さあ、みんなよくねて、ねないと

なおらないのよ」

と、ふとんをたくさん用意し……

「あたし注射しなくちゃ、お枕が足りないわね　メリさんとピッ

ちはぎぶとんでがまんよ」……

ここには「ねないとなおらない」「足りないから」という因果関係の処置がみられる。また病気にふとんをたくさん用意することや、枕の代用としてぎぶとんの利用は、その物の性質・機能など、やや本質に迫っており、その初期にみる直観的象徴的利用より高度なものがあるがわかる。これらは数量的認識をもあらわしており、それ以前の経験でえた表象の活用であると考ええる。また「ふとんをたくさん用意し」「あした注射しなくちゃ」など計画性をみせている。計画性は「見通し」の思考作用であり、「頭の中で行動の模型実験を行なうこと」(11 九五頁)である。行動の模型実験を行なうためには、すでにどこかでそれと同一か類似の体験がなければならぬ。それは周囲の人々か自己の対象活動によってえた表象が役立っている。

このように自然的・社会的事象の理解に比べて、日常生活面の理解は直接経験であるためにヨリ正しいものとなっていると考えられる。

## ● 美的センスと対象利用

調査によると、この期に入って色彩・形態に対する美的センスをみせている。例えば、服装に対する要求・選択、人形の服の着替え遊び、積木の左右対称的構築、踊りの仮装に布類をあれこれ選択利用する(B)ことがみられる。

この色彩・形態に対する好み、つまり主観的・情緒的对象利用活

動と並行的に、あるいはややおくれて色・形の弁別の客観化が進んでいる（後に詳細に述べる）ことは心理学的諸研究の結果と一致する（2二〇三〜二五三頁）このように、客観的認識つまり科学性と情緒的認識つまり芸術性とは、対象活動のなかで相互に他に支えられながら高められていると考えられる。

● 加工的操作活動

以上みてきたように、遊びのなかでの対象活動はそれ以前に習得した操作の諸様式と事物についての諸知識を利用してゐる。つまり遊びにみる対象活動は自己の習得した技能と認識の実践であり、自発的・思考の対象活動が主体であるように思われる。したがって、操作活動は無意識的になつてゐる。

一方、ハサミで物を切る、砂場をシャベルで掘る、紙を折る、ボタンをはめるなどがみられる（A・B）。これは身体機能（とくに手）の分化・統制力の習得と周囲の人々の模倣、あるいはすすめてはじめてゐる。

とくにハサミ・シャベルはそれより以前には与えても、あるいはモデル的活動を示しても、その機能的使用はみられなかった。しかしたん使用しはじめると、子どもは切る、掘ることに専念し、いわゆる機能アソビのくりかえしている。それは加工された結果に目的があるのではなく、また模倣遊びにみるような対象利用の計画性はみられない。

しかし、このハサミやシャベルの使用の理解は対象活動に媒介物を用いる活動であり、人間の肉体的能力の限界をこえた結果に導く。この器具の使用と加工は環境の变革に対する積極的活動であり人間の独自の対象活動として重要な意味をもっていると考える。この加工の対象は可塑的なものからはじめられている。

その他人形の家に色をぬるなど（B）の一例はあるが、それはおとなの提案と協力によつてはじめてゐるので、あまり自主性はみられない。

以上みてきたように、身体諸機能を駆使しながら、直接対象に接触して多様な対象操作技能と認識を蓄積すると、やがてその技能を種々複合して他の目的（生活経験の再現）にこれを奉仕させてゐる。つまり、思考的に対象を利用することに専念する。その技能利用の過程は無意識的になつてゐる。

また認識も同様の傾向をみせてゐる。つまり、それは直接対象に接触のといふより、自己のもつ表象を活用しながら対象をやや視（聴）覚的に把握するようになってゐる。

この対象の思考的利用の過程でも、技能と認識は高度化しつつある。つまり、それ以前の技能・認識を基礎に、さらに前記のように媒介物を用いての対象変革（積極性のある技能と、形態・色及び因果関係など高度な認識）へ進みつつある。しかも、その認識は芸術性より科学性をみせはじめてゐる。

\* \*